

令和8年の年賀状

昭和の時代、正月の三が日には近所へ年始参りをしたり、職場で賀詞交換会をしたりしたものです。現代でも神社やお寺に初詣し、山に登ったり海岸で初日の出を拝んだりする習慣は続いています。しかし、核家族化が進み、都会に人口が集中するにつれ、地方に住む親族や友人と会う機会は減ってきました。そこで私は、元日の年賀状を出し、年に一度のご挨拶だけは続けたいと思っています。

近年では「年賀じまい」をする人、メール、LINE、Facebook などネットを使った年始の挨拶も増えています。その一方で、葉書による年賀状は、年々少なくなっているようです。私は、年末の年賀状を書くのを楽しみにしています。Word で用紙をはがきサイズに設定し、文字や絵をスタンプから選び、好みの写真を挿入して文字を打ち込めば完成です。宛名の印刷には「筆まめ」など便利なアプリがあり、毎年使っていると、昨年出した人、出したのに来なかった人が分かり、年に一度の安否確認にもなります。年賀じまいをされた方とは、自然とご縁が無くなることもあります。

さて、今年の干支は「馬」ですので、馬の絵を馬頭観音像の中から選びました。馬頭観音とは観音菩薩の化身の一つで、「六観音」の中で畜生道を救う役割を担います。その特徴は、頭上に馬の頭を載せ、怒りの表情（忿怒相）をしていることです。通常の観音が穏やかな顔立ちであるのに対し、馬頭観音は牙をむき、怒髪天を衝く姿で表現されます。一般的な像容は「三面八臂（顔が三つ、腕が八本）」で、剣・斧・法輪などを持ちます。右図の絵は、馬頭観音像と冠の馬の絵の部分を切り出して拡大したものです。東大寺「六観音図鑑」に掲載されていた馬頭観音像（ボストン美術館所蔵）の頭部を、私が模写した絵です。

馬頭観音は、馬の守り神として、道端や寺院に祀られることが多く、日立市周辺にも、馬の供養や交通安全を願って建立された馬頭観音の石仏が点在しています。助川山や御岩神社、鮎川の岸辺など、自然と信仰が交差する場所に静かに佇んでいます。「馬頭観世音」と刻まれた石碑は、愛馬の供養や交通安全祈願の証です。

また、馬は神の使いといわれています。人と神を結ぶ存在として語り継がれています。その由来は、絵馬という形に変わり、今も神社に神聖な存在として息づいています。

